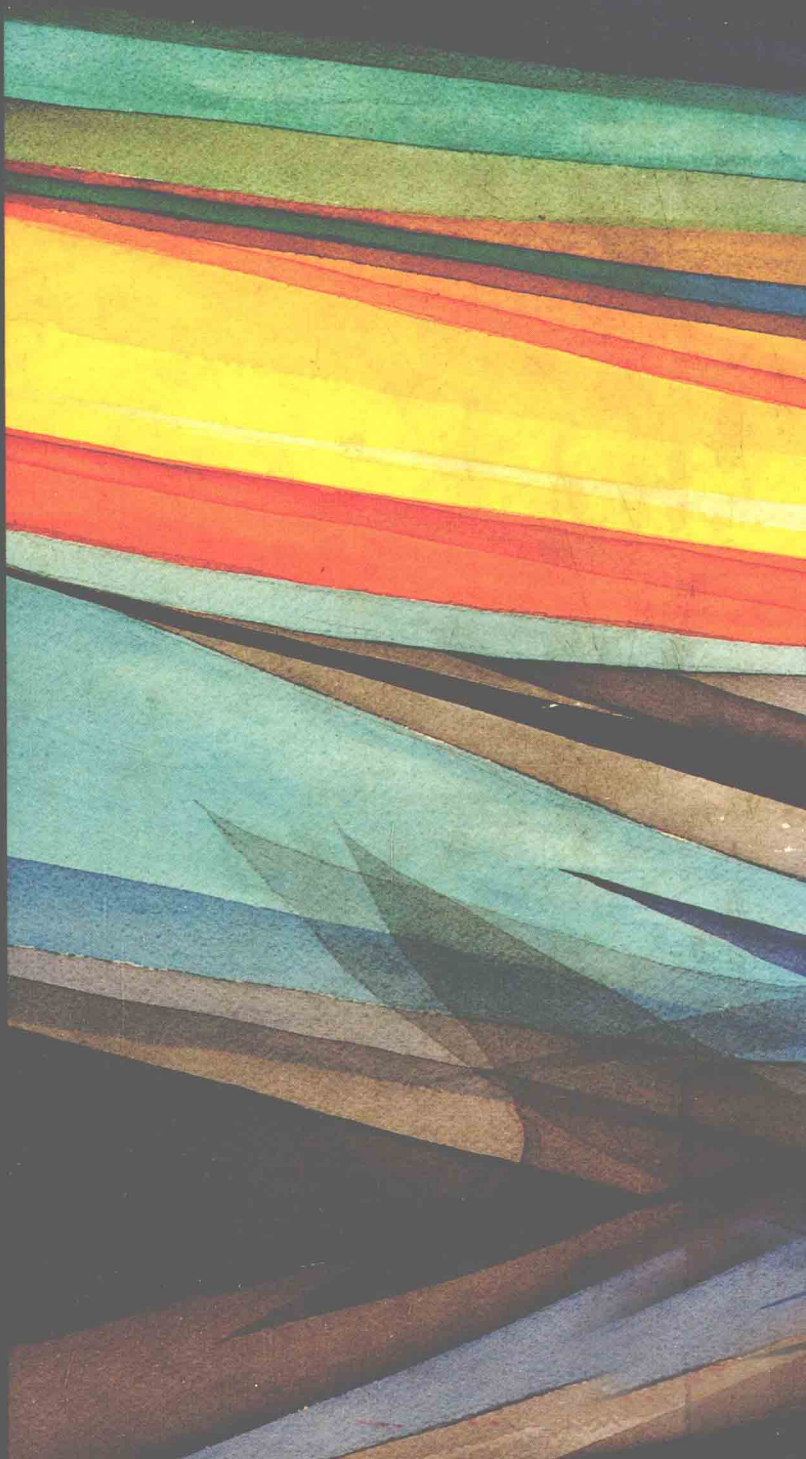
愛の時代（下）

瀬戸内晴美



愛の時代
（下）

瀬戸内晴美

講談社

愛の時代（あいのじだい） 下

一九八二年一一月二〇日第一刷発行

著者――瀬戸内晴美（せとうちはるみ）
© Setouchi Harumi 1982 Printed in Japan

発行者――三木　章

発行所――株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―二　郵便番号一二二　電話東京〇三―九四五―一一一（大代表）　振替東京六―三九三〇

印刷所――豊国印刷株式会社　製本所――大製株式会社

定価――一、〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN4-06-200097-0（0）　（文1）

下卷

目次

桔梗　7
こぼれ萩　39
山茶花　60
紫式部　80
貴船菊　108
散紅葉　134

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

晩菊 160
ぼけ 192
水仙 224
玉椿 251
白梅 275

愛の時代 下

装画・加藤　一
装幀・山岸義明

桔　梗

修策が訪れたのは、怜子が帰って汗を流し、着替えを終え、家中の空気を入れ替え、庭に打ち水をしている時であった。

タクシーの帰る音を見計らって、怜子は門を開けた。

修策は怜子の顔を見ないで、さっさと門をはいり、怜子のさきに立って玄関へ向かったが、怜子が門に掛け金をかけて歩き出したとたん、振り向いて怜子を抱きよせた。

怜子はされるままに修策の抱擁をうけていた。修策の唇の位置が移るにつれ、唇や、瞼や、耳や、首筋に電気がとおされ、確実な反応が湧き、自分が女を取り戻すのが感じられた。修策はちょっと怜子を抱き上げようとしたが、よろけた。

「重くなったな」

「お年でしょう」

怜子が憎まれ口をきいた。

「こいつ」

修策は機嫌のいい声で、怜子の頭に軽いげんこをくれ、そのまま肩を抱いて玄関に入った。
残暑は例年になく厳しかったが、もう空気の澄みようや、空の気配には秋が感じられた。
「やっぱりここの空気はおいしいよ」
修策は座敷にくつろぎながら、怜子の出す茶をゆっくり飲みほした。
こうして向かいあって坐ると、わかれていた時間がかき消されるような、懐かしさだけが漂ってくる。
少しやつれたようだと、怜子は修策の横顔を見た。
「少し痩せたんじゃないのか」
修策が同じことを口にしたので怜子は笑った。
「ちょっと大変でしたから……晃二さんの事故でごたついて」
「何時まで入院してるの」
「まだわからないわ。今日目の手術だったんです。片方だけまだひとつ残ってるし、手術の結果もわからないし、若いから他の回復は早いようだけど」
「あんまり親身に面倒みるのも考えものだよ」
「どういう意味ですの」
怜子の声が硬ばった。この間から修策と気まずくなった原因に触れていきそうで、怜子の気持ちがとがってきた。
「まあ、よそう。そのことをいうと、きみがまた神経たてるから、ゆっくり話せばわかるよ。酒が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

欲しいな」
　怜子はたって、すぐウイスキーや氷を卓上へ並べた。
「すっぽんが食べたいね」
「大市は今日はお休み日ですよ。明日いきましょう」
　怜子は修策に向かいあっていると、ここ一ヵ月ばかり修策に対して抱いてきた、得体の知れない不満や違和感が、あっけないほどのたわいなさで、かき消されていくのを感じた。
　修策に馴れきった肉体が、怜子の心を裏切るように、いっきょに修策の方へ傾いていく。
　眠りの中で、怜子は海の底にいた。
　修策の姿はなく、自分一人だという孤独な感じがあった。あたりは暗く、どこからかさす一筋の光は、怜子の傍までは届かず、時々闇の中を光るものが流れ、星のように走った。鱗の光る魚だとしばらくして怜子は気づいた。
　深海の魚に目はあるのだろうか、怜子はそんなことを思っていた。次第に瞳が闇になれてくると、闇の中にもほのかに物の形が浮かんでくる。星のように光る魚にも、丸いのもあれば、長いのもあるようだった。
　ゆらゆら揺れる物は藻の影のようだ。
　女の黒髪のようにたがいに絡み合い、もつれ合ってゆらめいている。
　海の底にも岩はあった。怜子は自分がそうした岩のひとつの傍らに、横たわっているのを感じていた。背の下は、砂なのか藻なのかわからなかった。全身から力が抜け、軀は重いのか軽いのかわ

からない。水の中に浮かび上がっていないところを見れば、重いのであろうか。目の前を走っていく魚の骨が透け、肉が透き通っている。まるで骨だけが光りながら泳いでいるようだ。

天国に似ているのか、地獄に似ているのだろうか。怜子は自分のいる位置をもっと確かめたいと、もどかしく思った。

軀にぴったりと波がまつわりつき、次第にその波が重さを加え、怜子は圧迫されて息苦しくなっていた。

ふと波が、修策の重さのようにも思う。いや修策の軀は、さっきまで自分に波のように隙間もなくまつわりついていたが、放れたばかりではなかったか。

修策との性愛の後で、ようやく二人が軀を放した時は、たがいに口をきくのもけだるいほど疲れはてていた。

修策は怜子の首の下に自分の腕を貸していたが、すぐそのことを忘れて、うるさそうに自分の腕を抜き取り、くるりと背を向けてしまった。と、すぐ軽いいびきが修策からもれていた。

怜子はそれを聞きながら、何時のまにかそのいびきが、自分のもののような気がしていた。

あれからどれほど深い眠りに堕ちていったのか、いや今もまだその眠りの中にいるような気がする。

どうして性愛の後のような深い眠りが、一人の時の眠りには訪れないのだろう。

無になること、自分を空にすることは、性愛の涯にこそ訪れる境地のような気がする。仕事に熱中した後の疲れは、全身の血が濃くなったようで、軀も心も重くなる。

性愛の疲れは、血が薄くなったようで、あらゆる細胞から重さが消えていき、全身がとほうもなく軽くなってしまう。
愛は奪うものではなく、自分を空にするほど与えきるものなのだろうか。
修策もまたこの軽さを味わっているのだろうか。
怜子は自分の上に加わる、息苦しい重さを払いのけようと身をもがいた。
波は、怜子がもがけばもがくほどいっそう重くねっとりとまつわりついてくる。怜子はふと、無数の蛇に全身を締めつけられているような息苦しさを覚えた。
もう一度、満身の力をこめて、波の圧迫からのがれようともがいた。
「おい、どうした」
修策が間近に顔を寄せて怜子をゆさぶっていた。
「うなされてたんだよ、あんまりひどくうなされるので、可哀そうで起こしたんだ」
「すいません」
怜子はようやく視点が定まってきていった。
声が咽喉に絡まって、半分も出なかった。
修策が、枕許の水差しの水を、口移しにのませた。
怜子はごくごく咽喉を鳴らせて、それをのみほした。
「また夢に出てきたわ」
「……」

「この前も出てきたのよ。今夜は海の底の蛇になってきたわ」
「よせ、蛇があれだと決まってやしないだろう」
修策の声が厳しくなった。
「だってそれ以外、蛇になってわたしを締め殺そうなんて人は覚えがないわ」
怜子は修策の顔の向こうの空間に目を放ったまま、独り言のように呟いた。
「この前は、あなたの首に長い細い指をかけて、あなたを締め殺そうとしていたわ。わたしは怖くて目を覚ましたの。長い爪も、その先に蛇の舌のような物がちらちらふるえていたのも、はっきり覚えている。そうよ、夜明け前だったの。わたしはあれは奥さんの生霊が飛んできて、わたしたちのしたことをじっと見ていて、あなたを殺そうとしたんだと思ったの」
修策はもう怜子の言葉が止められないと思ったのか、それも枕許にあったブランデーを、自分でグラスに注ぎ、のみくだしている。
何時もなら、同時に怜子のグラスにもブランデーを注いでくれるのに、今夜はそれを忘れている。
「その時、わたしは何故この方はわたしを殺そうとしないで、あなたを殺そうとするのだろうと、不思議に思ったの。普通は、妻は夫を怨まず、愛人を怨むものでしょう」
「……」
「でも、その理由はやがてわかったの。あの方はあの頃、すでに死期を知っていたのね、だからあなたと一緒に、未知の旅へたってほしかったのね、だからあの時、あの人の生霊は、あなたと寝て

いるわたしの方に、ちらりとも目をくれなかったのよ」
「……」
「でも今夜の夢は違う。死霊になったあの人は、わたしを憎悪しているのよ。わたしが、今もあなたとこうしてつづいているのを、許し難いと思ってるんだわ」
「見たよ」
修策が低い声でいった。
「ライターを落としてマッチを探そうとしたら、あれの手紙があった」
怜子は思わず身を起こした。
衿元をかきつくろい、蒲団の上に坐り直していた。
「いやだわ」
「探したわけじゃない。きみが何時も手文庫に、はさみや、耳かきや、マッチを入れているのを見ていたから、何気なく開けただけだ。そしたら、あれの字がいきなり目に入ったので、正直ぞっとした」
「寝物語にも、あなたに手紙のことはいわないでくれって、書いてあったでしょう」
「そうかな……おれにはこの手紙を、おれに見せて下さいって、あれが叫んでいるように見えた」
怜子は驚いて、修策の顔を見直した。
咽喉が再び焼けつくように乾いてきた。怜子は自分でブランデーをグラスに注いだ。掌が震え、グラスのくちにブランデーの瓶が当たって、ちかちか鳴った。

この部屋の二人の傍に、頼子の霊が、音もたてず、坐っているような気がした。
「抱いて」
怜子は、訴えるように修策にいった。修策が腕を伸ばし、怜子の胴を巻き込み、自分の方へ引き寄せた。怜子は全身で修策の方へ倒れかかり、修策の胸の中にもたれた。
修策は怜子を抱きかかえたまま、片掌でブランデーをのみながら、言葉をつづけた。
「この手紙に書いたことを、全部きみは信じているのか」
「全部ってわけでもないけど……だって死んでいく人が、そんな嘘をつく必要ないでしょう」
「必要があったかどうかわからないさ、本人は死んでいるのだから……しかしきみは、考えてみたことがあったか、あれがおれに遺書を書き残しはしなかったかと」
怜子は胸を衝かれたように思った。思わず上体を修策から放そうとしたのを、修策は腕に力をこめて、いっそう強く抱きしめた。
「あれは、おれにも長い手紙を残していた。死んだすぐあとには知らなかったのだ。四十九日も済んで、仕事にかかろうと、書斎の机の引き出しを開けた時、その中から出てきた。この手紙にひってきするくらい長い手紙だ」
「それに書いてある気持ちと、わたしへ来たのと違うんですか」
「違うのが当たり前だろう」
「あなたへのは途中で切れていないのですか」
「途中で切れているといえば、いえるし、そこで終わっていると見れば、そうともとれる」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com